

1. 研究の意義

1.1 高まる水への関心

近年、生活環境の水に対する関心が高まっている。どんどん高密化して行く都市空間に自然を呼び戻す必要性が多く説かれている中、自然の代表的要素である水の価値も、序々に認められているようである。

かつて江戸は、水の都と呼ばれるほど水網の発達した都市であった。水は人々の生活に常に密着した身近なものであった。広重の「名所江戸百景」を見ると、描かれた全119景の江戸名所のうち、実にその8割に当たる94景が、川・海・堀や池などの水を絵の重要な要素として描いている。

その後、時代を経て高度経済成長期に入ると、産業構造の変化によって、東京の河川は地面を得るために暗きょ化され埋め立てられて行った。かつて江戸城の外堀として景観を作り出していた飯田堀が埋め立てられ、再開発ビルによって変わったことも記憶に新しい。

しかし、近年では、都市でやすらぎを得るための水空間の価値は、再び認識され始めている。東京湾の再開発計画を見ても、関係省庁や東京都、そして臨海6区が水辺のアメニティ回復のために実にさまざまな構想を練っているようである。江戸川区の古川や江東区の横十間川のような河川再生も多い。

1.2 集合住宅への水導入の増加

このような高まりの中、集合住宅にも水空間が多く造られるようになった。雑誌「週刊住宅情報」によれば、東京都心部で水空間を持つ集合住宅が登場したのは1980年には2件、81年に1件だったのに対し、84年には急増して16件、85年15件、86年16件になっている。

こうした集合住宅の水の多くは、団地の建設に伴なって人工的に建設されたものである。そして、住民の親しむ水、すなわち「親水」の機能を目的として造られたものである。当然ながら、自然形成の水とは異なった特色を持つ。多くの水は浄化され、水深も安全に保たれ、常に制御されて安定した魅力を発揮している。しかし、一方では、水を強制的に稼働するだけに、費用がかかり、機械設備の維持管理にも手間がかかる。水に入って遊ぶ子供が事故を起こすこともある。団地の水はまた、人工的ゆえの多くの問題点も持つのである。